様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５３０７６４

研究課題名（和文）データベースを用いたロールシャッハ解釈支援システムの構築

研究課題名（英文）Development of the Rorschach Interpretation Assistance System Using the Database

研究代表者
高瀬　由嗣（TAKASE, Yuji）

明治大学・文学部・准教授

研究者番号：８０３２６５５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,600,000円、（間接経費）　780,000円

研究成果の概要（和文）：われわれは，ロールシャッハ・テストの解釈の妥当性を高める方法としてデータベースの応用を提案した。データベースに蓄積された豊富なデータは，解釈のための客観的な根拠となり得る。今回の研究期間においては，このデータベースを用いて，以下の研究を行った。すなわち，（１）ロールシャッハ人間運動反応における可視性および活動性概念の提案と，それらの精神病理査定への応用の検討，（２）ロールシャッハ・テストにおける動物・無生物運動反応の解釈仮説の再検討，（３）TATとの比較を通じて行われたロールシャッハ・テストが映し出すパーソナリティの特徴の検討，の３点である。

研究成果の概要（英文）：We suggested the application of the database as a method to enhance validity of interpretation of the Rorschach. An enormous amount of information stored in the database could be objective evidence for interpretation. In this period, the following researches using this database were conducted: (1) proposition of the concept of visibility and activity in the Rorschach human movement response, and discussion of their application to psychopathological assessment, (2) reexamination of the interpretation hypothesis of the animal and the inanimate movement responses in the Rorschach, and (3) examination of the personality features described in the Rorschach through comparing with TAT.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：ロールシャッハ・テスト　データベース　解釈　妥当性

１．研究開始当初の背景

ロールシャッハ・テストは，国内外の多くの調査が示すように，心理臨床の場では極めて使用頻度が高い。しかし，科学性の点でこの検査は現在さまざまな批判にさらされている。なかでも特に重要な批判は解釈の妥当性に関する問題である。つまり，解釈者側の要因（主観，テスト経験の質と量）が査定結果に重大な影響を及ぼしたり，Exner の包括システムに代表されるような定式化された解釈方法がときに被検者を過度に病的に評価するといった問題である。ロールシャッハ・テストの使用頻度の高さに鑑みて，このような問題は早急に検討されねばならない。

そこで，本研究では，解釈の妥当性を高める方法としてデータベースの応用を提案する。すなわち，データベースに蓄積された膨大な情報（反応逐語録，反応領域の画像データ，スコア，被検者の年齢，性別，教育歴，精神医学的診断の有無等）を規準として位置づけ，いま問題としているプロトコルがどのようなタイプの集団に出現しやすいタイプのものなのか，あるいは集団全体の中のどこに位置づけられるのかを検索し，その結果を参考にして解釈をすすめるという発想である。データベースに蓄積された豊富なデータは，いま問題としているプロトコルを解釈するにあたって客観的な根拠となり得る。

ロールシャッハ・テスト研究に応用された従前のデータベースは，Exner のそれに代表されるように，主としてスコアのみが扱われ，反応逐語録や領域の画像などにはあまり目が向けられていなかった。つまり，言語や画像データは電算化しにくい性質をもつため，従来の研究はこれらを積極的に扱おうとはしなかった。しかしながら，スコアとは被検査者の与えた言語表現や，被検者の指示した図版の一領域に便宜的に与えられたものであることを考えるならば，スコアのみならず，その元にある言語や画像データそのものを直接に扱おうとするわれわれの試みは，スコアリングに介在する余計なアーティファクトを排除した，より精度の高い分析を可能にする。このような背景から，われわれは本研究の着想に至った。

２．研究の目的

本研究の目的は，ロールシャッハ・テストの解釈の妥当性を高める方策として，データベースを用いた解釈方略を構築することである。すなわち，膨大な情報を利用して，いま目の前にあるロールシャッハ・プロトコルの客観的な位置づけを把握することにより，解釈の妥当性を高めようとする試みである。膨大なデータから引き出される情報は，解釈のための客観的かつ明確な根拠となる。この試みは，昨今のロールシャッハ・テスト解釈の妥当性に関する批判に応えるものである。

３．研究の方法

本研究を遂行するにあたって必要な手続きは，(1)データベースへの登録データの補充，(2)データベース機能を駆使した新たなロールシャッハ分析・解釈法の提案，(3)データベースに登録された膨大なデータに基づく，上記の分析・解釈法の妥当性検証，の 3 点である。(1)の作業は，将来の標準化を視野に含め，規準となる非患者群のデータ収集と登録を中心に行った。(2)と(3)の詳細については，以下の研究成果に示した。

４．研究成果

4-(1) データベースへの登録状況

2014 年 6 月 26 日現在，われわれのデータベースには，非患者 429 名，不安障害圏 72 名，精神病圏 81 名，パーソナリティ障害圏 20 名，その他の精神疾患（発達障害を含む）67 名，総計で 669 名のロールシャッハ記録が登録されている。登録されたロールシャッハ反応数の合計は 15,392 個（１人あたりの反応数の平均は 23.01）となり，これらすべての反応について逐語記録（言語データ），反応領域図（画像データ），スコアが保存されている。なお，規準を構築するために収集した非患者群のロールシャッハ記録は 429 名（男性 156 名，女性 273 名）に及び，その平均反応数は 23.51 個（標準偏差=13.18，範囲 10-96），平均教育年数は 13.95 年（標準偏差=1.70，範囲 9-21）となった。しかし教育水準が相当に高く（4 年制大学卒業以上に該当する人が 95 名含まれる），女性が多いという点で，このデータには偏りがあるといわざるを得ない。それゆえ今後は，本邦の人口比率に照らして協力者をバランスよく募ることが課題となった。

4-(2) ロールシャッハ人間運動反応における可視性・活動性とその解釈仮説

上記のデータを用い，今回の研究期間は以下の研究を行った。まず，データベースに蓄積された豊富な言語データを利用し，人間運動反応（以下，M と略）の内容を検討した。M 反応は，ロールシャッハ・テストの分析・解釈においてきわめて重要な変数として位置づけられるが，その内容の解釈仮説は十分に検証されているとは言い難い。そこで本研究では，新たに提案した可視性（visibility）という概念と，従来から M 反応の内容分析の一環として用いられてきた活動性（activity，すなわち active-passive）という２つの概念を取り上げ，各精神疾患群の反応傾向に基づいて，それらの解釈仮説を吟味した。

4-(2)-①　可視性

可視性とは，M の構成要素である運動を，可視的な筋肉運動（「叩く」「跳ねる」），思考や感情などの精神の活動（「怒る」「悩む」），そしてその両方の複合（「怒って叩く」）の 3 種類に区分したものである。つまり，この概念は，当該の運動が目に見えるか否かを問うものである。この観点から，可視的な運動で

ある第一のタイプの反応を顕在型（manifest type），直接観察できない心の動きを意味する第二のタイプを精神活動型（intrapsychic type），第三のタイプを複合型（combined type）と命名した。

この可視性の概念および分類法の基礎となったのは，データベースに蓄積された 559 名のロールシャッハ記録である。筆者はこの記録の中から M 反応 2,136 個を抽出し，それらがどのような言語で構成されているのかについて，データベースの言語検索を用いて検討した。主に動詞に焦点を当てて分析を行ったところ，顕在型の運動を表す動詞（例えば「跳ぶ」「踊る」）が 314 種，精神活動型の動詞（例えば「愛する」「困る」）が 95 種，単語として複合的なニュアンスを持つ動詞（例えば「威圧する」「おどける」「しょんぼりする」など）が 89 種，特定された。

可視性の観点に基づく内容分析を，各精神疾患群（不安障害群：53 名，統合失調症群：51 名，境界性パーソナリティ群：20 名），および比較群として非患者群（118 名）に適用した結果，不安障害群には比較的質の高い顕在型が，境界例群には質の低下した複合型と精神活動型が，統合失調症群には了解不能な精神活動型が多く出現することが認められた。ここから，M 反応は，顕在型→質の低下した複合型→精神活動型の順で適応水準が低くなることが示唆された。さらに，この結果はインクブロットに知覚された人物像への同一化の質という観点からも検討された。すなわち，顕在型は人間像の可視的な動きを生き生きと感じとりつつも，現実吟味の機能が適切に機能し，現実の刺激と被検査者との間に明確な一線が引かれていることを示しており，その意味でもっとも健全な同一化の形態である共感性を反映するものであると考えられた。一方，質の低下した複合型は自らの空想や願望と対象とのそれとの区別がやや曖昧になっていること，さらに精神活動型になると，自他の境界がほとんど失われていることを意味すると仮定された。したがって，この２つのタイプは不健全な同一化の形態である「投影同一化」（質の低下した複合型）や，自他の区別がほぼ喪失された「自我意識障害（Schneider, 1934）」（精神活動型）を反映すると考えられた。

4-(2)-②　活動性

M 反応における活動性概念（active と passive）に注目した。これは，Rorschach,H. から Exner, J. E. に至るまで，さまざまな研究者によって取り上げられてきた概念であるが，その解釈仮説はもとより，分類基準さえも明確にされていない。そこで本研究では，過去の文献にあたりながらその定義および分類基準，そして解釈仮説について整理するとともに，実際の精神病理群のデータに基づき，精神病理という観点からその仮説の妥当性について検討した。まず，過去の文献を精査し，active は「動的，あるいは能動的（意図的･意識的）な筋肉運動･精神活動」，passive は「静的，あるいは受動的（非意図的・反応的・不随意的）な筋肉運動・精神活動」と定義するのが適切であると判断された。ついで，先述のデータベースに蓄積された合計 559 名のロールシャッハ記録から，active に該当する動詞 370 種，passive に該当する動詞 131 種を特定し，これを分類の基準として位置づけた。さらに，これらの作業と並行して，活動性概念の解釈仮説を過去の文献をもとに再吟味した。その結果，active の数の多さは心的エネルギーの高さ，積極的・能動的な対人行動を，passive の数の多さは心的エネルギーの低さ，消極的・受動的な対人行動を反映するものと考えられた。

次に，この解釈仮説の妥当性を検討するために，上の定義と基準を用いて M 反応を分類し，実際の精神疾患群（4-⑵-①を参照）の出現頻度を検討を調べた。結果として，不安障害群はすべての群の中で active がもっとも少なく，passive がもっとも多かった。一方，境界性パーソナリティ障害群は，逆に４群の中では active が突出して多く，passive がもっとも少なかった。過去の文献に記載された，不安障害患者や境界性パーソナリティの行動特徴に照らしてみると，上の仮説（すなわち，active と対人場面での積極性，passive と消極性）は一定以上の妥当性を有することが認められた。一方，統合失調症群には有意な特徴を見出すことができなかった。これは，一部には統合失調症群が多様な病型から構成されていることに由来すると考えられた。

4-(2)-③　可視性と活動性の２軸からなる精神病理査定の試み

可視性と活動性という２つの概念を組み合わせることによって，さらに豊かなパーソナリティ情報を引き出すことができる。そこで本研究では，活動性を縦軸，可視性を横軸とした座標から，各病理群の特徴を検討することを試みた。これは，当該プロトコルの全体の中での位置づけを視覚的に瞬時に把握できるため便利な方法と言えよう。

この試みを実行するために，下記のような計算式を考案し，各人の結果を得点化した。そして，この式から得られた２つの数値の座標を平面上にプロットした。

① 活動性得点（縦軸）＝（active－passive）÷M の総数×100

② 可視性得点（横軸）＝｛顕在型－（0.5×複合型＋精神活動型）｝÷M の総数×100

Figure 1 はこの２つの軸によって各群の特徴を視覚的に表したものである。まず，不安障害群は３つの精神疾患群の中でもっとも右寄りに位置している（横軸）。つまり，この群は，人間像に対する同一化の程度がもっとも健全なレベルにある（言い換えると，現実吟味力が適切に機能している）。それに加えて，運動の活動性は突出して低い（縦軸）。この結果から考えられるのは，不安障害群においては現実吟味や自己統制といった自我

機能に問題は少ないが，全般に心的エネルギーが低下し，生き生きとした対人関係を体験することが難しくなっているということである。不安障害群のＭ反応の印象を一言でまとめるならば，「安定・消極的」とでも表現できよう。

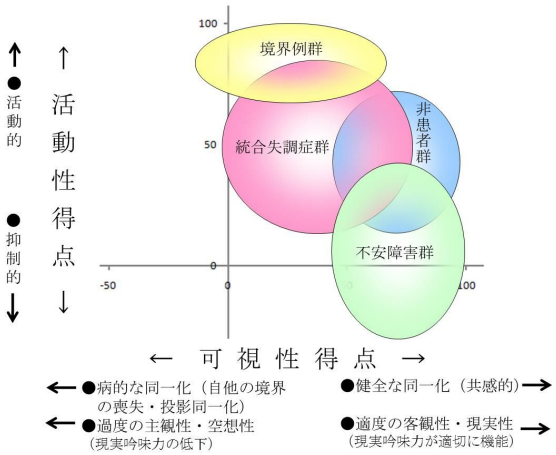

Figure 1　Characteristic of the Distributions of Visibility and Activity Scores in Each Group
各群の可視性，活動性得点の分布の特徴

次に境界性パーソナリティ群はかなり左寄りの，もっとも高いところに位置することがわかる。すなわち，人間像に対する同一化の程度という点でいうならば相当に不健全なレベルにあり，活動性の点ではもっとも高い。これは，先に述べた不安障害群の対極の位置である。この結果から読み取れるのは，この群の被検査者は他者との適切な距離を喪失した激しい同一化を惹起しやすいのみならず，非常に積極的な行動パターンを取りやすいという点である。すなわち，他者に対して内的な怒りや恐れなどの感情を投影し，きわめて積極的（攻撃的）な行動によってそれに応えようとする可能性がある。このような特徴を一言でまとめるならば「不安定・積極的」ということになろう。

一方，統合失調症群は比較的左側に位置しているが，活動性に関しては大きな特徴を見出せなかった。上にも述べたように，統合失調症群には多様な病型が含まれており，それぞれ表面に表れる症状や行動特徴などが微妙に異なるため，それがこのように大きな散らばりを生み出したのであろう。しかし，この図にはっきりと示されるように，この群は他群に比して可視性得点の著しく低い被検者が占める割合が大きいことは間違いない。したがって，少なくとも自他の境界の曖昧さ（Schneider による自我意識障害），そして過度の主観性や空想性などといった可視性の面から引き出される特徴に関しては，病型を超えて，多くの統合失調症患者に共通するものといってよいであろう。

以上，データベースを駆使し，ロールシャッハ Ｍ 反応にみられる言語表現を精査することにより，可視性という新たな視点に基づいた分析法が考案された。また，実際の精神疾患群にこの分析法を適用し，その出現頻度を検討した結果，可視性概念の解釈仮説が明確に導き出された。さらに，この可視性概念に，従来の活動性概念を加えた２軸による分析法を用いると，Ｍ反応の分析・解釈がより豊かになることも示された。

4-(3) ロールシャッハ・テストにおける動物・無生物運動反応の解釈仮説の再検討

次に動物および無生物運動反応について，文献に基づいてその解釈仮説を再検討するとともに，データベースに蓄積された２つの事例を通して新しい仮説を提案した。動物運動反応（以下，FM と略）と無生物運動反応（以下，m と略）のいずれも，反応内容に応じて幾つかのサブタイプに分類できること，それらのサブタイプにはそれぞれに固有の解釈上の意味があることが示唆された。

4-(3)-①　FM 反応の解釈仮説とサブタイプ

ここでは FM 反応について，文献に基づいてその解釈仮説を再検討した。Rorschach, Klopfer, Schachtel, Piotrowski らの文献を精査したところ，FM 反応が衝動性を反映するという考え方の背景には，一般に被検査者は動物の動きに同一化しにくいため，動物像には自らの意識的な価値体系から排除されたもの（すなわち，原始的な衝動性）が投影されやすい，という仮説が存在することが理解された。しかしながら，実際にデータにあたってみると，必ずしも衝動性を意味しないと思われる FM 反応も数多く出現していることが確認された。これを踏まえて，本研究は動物運動反応について以下のようなサブタイプがあることを提案した。すなわち，(a) 純粋形態反応に近い反応（第一のタイプ），(b) 攻撃的な内容を伴った反応（第二のタイプ），(c) 人間運動反応に近い反応（第三のタイプ）の３種類である。そして，この３種の中では，第二のタイプ（攻撃的な内容を伴った FM）こそが原始的な衝動性を反映すると仮定された。この仮説については，データベースの中から幾つかの事例を取り上げ，そこに登録された生育歴情報と照合することによって，検証を行った。

4-(3)-②　m 反応の解釈仮説とサブタイプ

一方，m 反応についてもさまざまな文献にあたり，まずはその解釈仮説を再検討した。その結果，m 反応とは，意志の力によってコントロールしにくい力によって自らの存在が脅かされてことを表しており，それゆえに精神的な緊張や葛藤を意味するものであることが理解された。しかし，実際のデータに基づいて m 反応の内容を検討してみると，意志の力ではまったく制御できない運動から比較的制御しやすい運動まで，幅があることが確認できる。これに基づき，本研究は，m 反応を(a) 自然，(b) 人工的，(c) 超自然，(d) 受動的，(e) 重力，(f) 抽象的，という６種に

下位分類した。そして，この６種のサブタイプの中では，「抽象的」（例えば「安定が切り崩されている」）が緊張の度合いがもっとも顕著であり，「人工的」（「飛行機が飛んでいる」）は比較的軽度であることを指摘した。この仮説についても，データベースに登録された２つの事例をもとに検証を行った。

4-(4)　ロールシャッハ・テストが映し出すパーソナリティの特徴—TAT との比較から—

最後に，データベースに登録されたデータの中から，ロールシャッハ・テストと他の心理テストを組み合わせて実施した事例を抽出し，個人内におけるテスト結果の関係から，それぞれのテストが映し出すパーソナリティの側面を質的に解明することを試みた。ここでは，特に同じ投映法である TAT を取り上げることにした。

ロールシャッハ・テストは意識の深い層（主として無意識）を映し出し，TAT はそれよりも浅い層（主として前意識）を明らかにする道具であるとするシュナイドマンの仮説が一般に浸透している。しかし，実際の事例にあたり，２つのテストが引き出した解釈結果を検討してみると，両者をあまりにも単純に図式化したこの仮説は必ずしも正しくないことが示唆された。両者から引き出された解釈には共通する部分が多々認められるのみならず，事例によっては，ロールシャッハ・テストに浅い部分が表れ，TAT に深い部分が映し出されることもある。それをふまえて，本研究は，テスト結果に意識層の深浅が表れる理由をテストそのものに一方的に帰すのではなく，テストの持つ課題の性質と被検査者側のパーソナリティ要因という２点に注目し，その相互作用という観点から考えるのが適切であることを指摘した。

ロールシャッハ・テストの特に形式分析は，人が外界に関わる際の「基本姿勢」と呼ぶべきものを引き出すのに対して，TAT はその課題の性質上，特に人間関係のあり方を引き出すことを得意とする。そのために，TAT は，ロールシャッハ・テストの引き出す「基本姿勢」よりも皮相なものを扱っているかのようにみなされやすい。このことがシュナイドマンの説が広く浸透した背景にあると考えられた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

高瀬由嗣，ロールシャッハ運動反応における active-passive の概念と精神病理との関係，明治大学心理社会学研究 6　　，2010，33-50.

高瀬由嗣，ロールシャッハ・テストにおける動物・無生物運動反応の解釈仮説の再検討 明治大学心理社会学研究，7，2012，17—34.

高瀬由嗣，TAT が映し出すパーソナリティの諸側面—ロールシャッハ・テストとの比較を通して—，中京大学　心理学研究科・心理学部紀要，12，2012，193—221．査読有.

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）

八尋華那雄監修，高瀬由嗣・明翫光宜編，金子書房，臨床心理学の実践－アセスメント・支援・研究，2013，総頁数 351.

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
http://rwdb2.mind.meiji.ac.jp/Profiles/22/0002157/profile.html

６．研究組織

(1)研究代表者

高瀬　由嗣（YUJI TAKASE）
明治大学・文学部・准教授
研究者番号：80326553

(2)研究分担者

藤岡　新治（SHINJI FUJIOKA）
専修大学・人間科学部・教授
研究者番号： 00156837

齊藤恵一（SAITO KEIICHI）
北海道医療大学・心理科学部・講師
研究者番号：50292131